

霧と剣の少年と白龍少女のほのぼの生活

セラ部長

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、墮天使総督とある女性との間に生まれた少年と白龍皇の少女との日常を綴った物語である。

目次

第4話	第3話	第2話	第1話
17	11	5	1

第1話

やあ、僕の名前は柏木尊^{かしわぎみこと}。駒王学園に通う高校二年生さ。

親しい人達からはミコと呼ばれてたりする。

そんな僕は現在、目の前に立つ異形と化したはぐれ悪魔の討伐に来ていた。

・・・うわあ。これ僕が今まで見てきたはぐれ悪魔の中でも五本の指に入るほど気持ち悪いなあ。

呑気にそんなことを考えていると、目の前のはぐれ悪魔がうるさく吠えてきた。

「死ねえええ!!人間風情がアアア!」

ええつと・・・目の前のこいつは馬鹿なのかな?そんなちつぽけな攻撃で何を仕留めるんだろうか・・・

当然、その攻撃は僕に当たらず、目の前のはぐれ悪魔は突然出現した幾多の鎖に拘束された。

「なんだアア!?この鎖はアアア!?外れないじゃねえかあ!!」

「うん。まあ神滅具^{ロンギヌス}で作られた鎖だからね、そう簡単には外れないよ」それを聞いたはぐれ悪魔は先程までの怒りの表情はどこへやら、絶望に染まった表情を見せた。

「ま、ままま待つてくれ!!もう人を食べたりしない!!だから命だけわああ!!」

なんか今更命乞いをしてきたんだけど目の前のはぐれ悪魔・・・

当然、そんなものには耳も貸さず、僕はもう一つの神^{セイクリッド・ギア}器で創った聖剣を持ち、うるさく喚いている目の前のはぐれ悪魔の首を切り落とす。

仕事を終えて一段落ついていると、この廃屋の扉が勢い良く開かれ、数名程の男女が入室してきた。

「はぐれ悪魔バイザー!貴方を消滅しに・・・え?死んでる?」

・・・うわっ!あの集団!全員この町の管理者?の悪魔達じゃないか!

これは見つかったら面倒くさいぞう!

そう思っていると、その集團の一人が僕に気づいたようで……
「……部長。あそこ、誰かいます……」

ヤバイ！説明するのも面倒くさいので即座に退散する!!

転移する途中、集團の一人がなんか叫んでたけど知ったことか!!僕は早く帰りたいんだよ!

……あ、生徒手帳落としちゃった。

——
???

「おかえりー！早速だけどご飯にする？お風呂にする？それとも、ワタ・シ？」

家に転移するなり、エプロン姿で出迎えてくれたのは、ダークカラーの銀髪を腰辺りまで伸ばし、透き通った碧い目を携える整った顔立ちの美少女。

……質問の内容は深く考えず、帰ってきたのでとりあえず挨拶を返す。

「うん、ただいま、ヴァーリ。とりあえず質問の最後の内容は聞かなかった事にするよ」

いま自分ができる最高の笑顔で返した。

この返しに納得いかなかったのか、ヴァーリは頬を膨らまして。

「ふん！最後のは九割九分九厘本気だもん！なかったことにするなんてひどい！」

いやいやいやいや、そう言われましても……

これに、僕は仕方なく目の前の彼女のご機嫌を治すため、ハグをする。

いきなりのハグに彼女は若干驚いてはいたものの、すぐに嬉しそうな様子で抱きしめ返してきた。

「へへへ、ニコお〜」

くっ！可愛すぎる!!何なんだこの小動物は!!

そんな可愛すぎる小動物の抱き心地を堪能していると、リビングに

いる母さんから。

「二人共おく、お熱いのはいいけどそろそろご飯にするから早く来なさい！それとそういうのはもつと夜になってからにして！」

ご飯の呼び出しとからかうような一言。コレには思わず僕とヴァーリは頬を赤らめる。

「……………ご飯……………食べようか」

「う……………そ、そうだね」

そう言つてリビングに入ると、そこには美味しそうな料理の数々。相変わらず母さんとヴァーリは料理が美味しいなと思つていると、ふとヴァーリが。

「それにしても今日は遅かったね？ミコならあの程度のはぐれ悪魔討伐、すぐに終わるでしょ？」

このことについて僕は正直に話す事にした。はぐれ悪魔の討伐を完了したらこの町の悪魔の集団がやってきたこと。

説明するのが面倒くさいから即座に転移したこと。

そしてうっかりして生徒手帳を落としてきちゃったこと。

これを聞いたヴァーリは同情した視線を送ってきた。

「てことは明日確実に訪ねてくるんじゃないの？」

大変だねえ。私も一緒に行くよ。そっちの方が楽でしょ？」

「……………ありがとう。ごめんね？僕の不注意なのに付き合わせちゃつて」

僕は申し訳なさそうにお礼を言う。するとヴァーリは見惚れるような笑顔で。

「気にしないで、困った時はお互い様でしょ？」

ああ、なんて優しい子なんだ！やっぱ僕は幸せ者だなあ。

そう幸せを噛み締めてると、ふと母さんからこんな提案が。

「とりあえず向こうは眷属になるよう迫ってくると思うから断りなさいよっ。」

もちろん。というか向こうの実力じゃあ僕らを眷属にするなんて絶対に不可能だろうけど。

そう思っていると、ふとヴァーリが。

「あ、明日の課題やってなかった!!教えて!ミコ!!」

ああ、やってなかったんだね、課題。

それじゃあ、手伝うとしようか。

その後、ヴァーリの課題を手伝った後お風呂に入って、ベッドで一緒に寝ることになった。

その際、ナニがあつたかは・・・察してほしい。

ああ、明日は悪魔との対談かあ・・・

行きたくないなあ・・・

第2話

朝、目が覚めて自分の右隣に違和感を感じた。

布団をめくってみるとそこには一糸纏わぬ自分の彼女の姿。

……しまった、昨夜の出来事の後、服着せるの忘れてたんだっ
た。

風邪は引いていないだろうか……

とりあえず、朝から目の保養にはなつたがこのままにしておくわけ
にもいかないので、目の前の彼女を起こすことにする。

「ヴァーリ、もう朝だよ。起きて」

すると、これが聞こえたのかヴァーリは目を擦りながら。

もたれかかってきた。

……まだ寝惚けてるみたいだね。

もたれかかってきたヴァーリの温もりと柔肌を堪能しつつ、僕は彼
女を起こすための最終手段を使う。

「……そろそろ起きないと僕一人で学校行くよ？」

これが僕の最終手段。一人で学校に行くこと。

何故かヴァーリはいつも一緒に行ききたがるので僕が一人で学校に
行くことを極端に嫌がる。

すると、これが効いたのか。

「!?ダ、ダメ!!!」

うん、ちゃんと起きてくれたね。

もちろん、今のは冗談のため即座に否定する。

「いやあ、ごめん。中々起きなかつたもんだからつい、ね？」

少しの謝罪を含めた否定の言葉。

すると、この冗談が気に食わなかったのか。

「ひどい!!私がものすっごくくー朝弱いこと知ってるくせに!!」

うん、すごく怒ってる。

でも顔を赤くして怒っているからか、全く怖くない。

そんな可愛すぎるヴァーリを収めるために、僕は彼女の頭を撫でてあげる。

「へへへ〜」

うん、チョロいね。でもそこが可愛いんだよねえ。

さて、こんなことしてても埒があかないので、そろそろヴァーリを着替えさせてリビングに行くこととする。

リビングに行くと、テーブルの上に一通の置き手紙。

多分母さんのものだ。ええつと、何何？

『今日は神の子を見張る者の施設で過ごすので帰れませーん！そこんところよろしく！』

・・・またかあ。相変わらず気紛れな人だ。

母の気紛れさに若干呆れつつ二人で朝食を食べる。

「またお義母さんどっか行っちゃったの？」

てことは今日の夜は二人つきり!？」

?ヴァーリが心なしか喜んでるような気がする。

というか二人つきりの時なんてよくあることじゃないか？

なんで喜んでるか疑問に思ったのでちよつと聞いてみることにする。

「ヴァーリ、どうしたのさ?二人つきりの時なんてよくあることだろう?なんでそんなに喜んでるんだい?」

すると、この問に対して、ヴァーリは勝ち誇った顔で答えてくれた。

「当然でしょ!だって二人つきりだよ!お義母さんやお義父さんの目を気にせずあんなことやこんなことができるんだよ!?!こんな天国はないじゃん!!」

・・・予想の斜め上の回答だった。

というかそういうことは母さんや父さんがいる中でもやってるよね?

そんな疑問はひとまず置いておいて、朝の準備が完了したため、二人で学校に登校する。

登校する途中、すれ違う人々のほとんどがヴァーリを見ていた。まあヴァーリは鼻肩目抜きに見てもとびっきりの美少女だから仕方ないと思う。

そんなことを考えながら、僕達は二人で教室に入る。入った途端、他の男子生徒達から嫉妬のこもった目を向けられたが、いつものことなので気にしないでおく。

すると、その中の嫉妬の視線を向けてきた男子の一人である兵藤一誠が僕達に話しかけてきた。

「なあ、尊。今日リアス部長がお前のことを呼んでるみたいなんだ。一緒に来てもらっていいか？」

ああ、やつぱりか。予想はしてたけど使いが彼だということには驚いた。てっきり木場裕斗辺りがくると思ってたんだけども。

そんな事を頭の隅で考えながら授業が終わった。

さて！悪魔との会談。どう接すればいいだろうか。

……とりあえず堕天使総督の息子って事は黙っておこう。流石に向こうも堕天使総督の息子の顔は知らないはず……知らないよね？

となるとヴァーリの正体も伏せておいた方がいいだろう。

この町に堕天使総督の息子と旧魔王の血縁者がいましたって事がバレて魔王が派遣されてきても困る。

「というわけで尊、今からついてきてくれるか？」

おおっと、深く考えている内に呼び出されてしまった。

まあ方針も決まったことだし大人しくついていくことにする。

「わかった。ところでヴァーリも連れてっていいかな？理由は後ほど説明するからさ」

「？ああ、わかった。……リア充め」

なんか最後にボソッと恨み言を言われた気がするけどスルーするでしょう。

兵藤一誠についていくと、この学園の旧校舎に辿り着いた。

「……それにしても結界がお粗末だなあ、これじゃあ侵入してくださいつて言ってるようなものだよ。」

(ミコ。この結界脆すぎない?)

コレにはヴァーリも思わず小さな声でツツコんできた。まあ当然だよ。

結界の出来にダメ出ししつつ、僕達は『オカルト研究部』通称悪魔の溜まり場にお邪魔することにする。

「部長。連れてきましたー!」

「ええ、入ってきてちょうだい」

それを合図に僕達は中にお邪魔する。すると、中にいたりアス・グレモリーが怪訝な顔をしてヴァーリを見てきた。

「……どういうことかしら?ヴァーリさんは呼んでいないはずなのだけど」

「いやあ、実はこの子も僕と同じ裏の関係者でねえ、同時に説明した方が楽だと思って連れてきたんだよ」

「……そう。ならいいわ」

どうやらこの説明に納得してくれたようだね。

まあ納得してくれなくても無理矢理話を通すつもりだったから別にいいんだけども。

「少し予定が狂ったけどまあいいわ。柏木尊君、ヴァーリ・ルジーナさん。貴方達を歓迎するわ。」

「それは悪魔としてだろうか?」

「……ええ、その通りよ」

よしッ!多分セリフの後で悪魔としてねとか言っただけでカッコつけようとしてるところを邪魔してやった。

その証拠にほんの少しリアス・グレモリーの眉間にシワがよって

る。「早速だけどこの生徒手帳。あなたの物で間違いないかしら?」

「うん、間違つてないよ。ありがとう」

渡された生徒手帳を確認して何か細工がされていないかを確認する。

うん。特に何もされていないみたいだね。されてても今のリアス・グレモリー達程度の細工だったら僕達には意味ないんだけども。

そう考えていると、早速リアス・グレモリーが話を振ってきた。

「ところで柏木尊君。貴方は何者なの？昨日のはぐれ悪魔を単独で殺すなんて」

・・・うーん。ここはどう答えるべきだろうか。

二つの神器を見せるのも悪くないんだけどややこしくなりそうだからとりあえず片方の神器だけを用いて剣を創る。

「裕斗と同じ創造系の神器!?それで昨日のはぐれ悪魔にも勝てたのね」

よし。見事に勘違いしてるみたいだ。流石にこちらが墮天使と人間のハーフで神器を二つも宿しているなんて事はわからないだろう。

「となるとそちらのヴァーリさんも何か神器を宿しているのかしら？」

すると、今度はヴァーリに話を振ってきた。

ヴァーリはこつちを見てどうすればいいかを目で伝えてくる。

僕はヴァーリの神器を展開する事の許可を首を縦に振ることで伝えると、ヴァーリの背中から青白く輝く翼が展開された。

「!?嘘でしょ!?貴方の神器はまさか白龍皇デイベイン・デイベイデイングの光翼!?!」

うん。すっごい驚いてる。他の眷属の皆も目を丸くしてるのが分かる。

すると、リアス・グレモリーは目を輝かせ。

「貴方達。悪魔にならない!?悪魔になれば「結構です」っ!!」

おおっと。僕が断る前にヴァーリが話を遮って断ってくれたみたいだ。すると、リアス・グレモリーは諦めきれないのか。

「・・・」応理由を聞いてもいいかしら?」

「はい、単純な話、メリットが一切ないからです。それに、貴方の実力では私達を転生させることは確実に不可能ですので、この話は断らせ

ていただきます」

ヴァーリがきつぱりと敬語まで使って拒絶の意思を見せた。

しかし、まだしつこく言ってくるリアス・グレモリーに嫌気が刺したので、少し力を開放しながら話しかける。

「・・・ねえ、こっちはハツキリと拒絶したよねえ。いい加減しつこいよ?」

「ツ!!?」

僕から発せられる圧力にリアス・グレモリーとその眷属達は目に見えて震えている。特に兵藤一誠なんかは膝をついてしまっている。

「・・・わかった。今回は諦めるわ。でもここは私達の領土なの。だからこの部活には入部してもらおうわ」

「うん。それくらいならいいよ。むしろこちらからお願いするよ」

そう言って、僕とリアス・グレモリーは握手をした。コレには他の眷属の皆もホツとしている。

「・・・ていうかまだ諦めてないんだね。」

その凶太さには呆れを通り越して感心するよ。

こうして、僕達と悪魔の会談は幕を閉じた。

明日から部活。行かなくちやなあ。

第3話

僕達がオカルト研究部に入部してから数日。

僕とヴァーリはハンバーガーショップで昼食を食べていた。

いわゆるデートつてやつだ。今日の朝、このハンバーガーショップの紹介がテレビでやっていて、それを見たヴァーリが行きたそうにしてたのでデートに誘って昼食はここになったというわけだ。

「うん！美味しい！ありがとうミコ！連れてきてくれて!!」

「どういたしまして。僕もヴァーリとデートできるのは嬉しいからね。寧ろこっちがお礼を言いたいくらいさ」

いやあ、ヴァーリが美味しそうに食べる姿は可愛いからね。見てるこっちが笑顔になる。

本当に僕の彼女は最高だよ。

そんな事を思っていると、視界にふと兵藤一誠と、この辺りでは殆ど見かけない金髪のシスターが見えた。

ああ、あのシスターはもしかして今フリードに潜入捜査させてる際の報告にあった聖母トワイライト・ヒーリングの微笑の所持者、アーシア・アルジェントかな？

だとしたら何故悪魔である兵藤一誠と一緒にいるんだろうか・・・
幸い向こうはこちらに気付いていないようだしこのまま観察する
としようか。

その方が面白くなりそうだしね!!

「ヴァーリ。そろそろ行こうか、面白いものが見れそうだ」

すると、ヴァーリは僕の言葉を聞いて、新しい玩具を見つけた時のように微笑んだ。

「了解。あの二人を尾行するんだね。接触はしないの？」

「うん。接触して見るのもいいけど僕達の性的に観察だけにした方がいいからね」

ヴァーリとあの二人の尾行方法について話し合っていると、標的が店を出た。

「ヴァーリ。二人が店を出た。すぐに追いかけてよう！」

「了解！既に片付けは済ませてあるよ！」

「パーフェクトだね。ヴァーリ！」

こんなやり取りをしつつ、僕らは標的を追いかける。

ふむ、どうやらゲームセンターに入ったようだね。

僕もやりたいゲームがあったから丁度よかった。

「ヴァーリ。観察のついでにゲームやらないかい？実は僕、今日やりたいゲームがあつてね」

「いいよ！奇遇だね。私も丁度やりたいゲームがあつたんだ」

そう言つて僕達はゲームセンターに入つてすぐ、ちよつと進んだ場所にある某太鼓ゲームの前に立つ。

即座に二百円を入れ、二人同時に鉢を構える。

さあ、今日こそは絶対に勝つぞ！ヴァーリ！！

—数分後—

ああ、負けた。これでもかというくらいに叩きのめされた。

・・・相変わらず上手いなあ。数ヶ月前までは僕の方がリードしてたつてのに。

ふと隣を見ると、そこにはピースしながらこちらに勝ち誇つた笑みを浮かべるヴァーリの姿。

・・・クツ!!ものすごく悔しいけど今のヴァーリが可愛すぎて何も言えない!!

そんなヴァーリの姿に見惚れていると、標的がクレイゲームでラッチューくん？とかいうぬいぐるみを取っていた。

・・・あのキャラクター。世界的に人気だったんだね・・・そんな至極どうでもいい事を考えていると、標的が動き出した。

ふむふむ。今日はどうやら一日中このゲームセンターで遊ぶよくだね。

「……何故貴方がその悪魔を助けるのですか？所持する神セイクリッド・ギア器も
トウワイス・クリティカル
『龍の手』と言ったありふれたものだというのが……」

ふむ、流石に疑うよね。

まあ隠す程の事でもないし正直に答えることとする。

「いやあ、この悪魔とは同級生でねえ。ほら、僕は人間界の学校に通っているからさ。流石に同級生が目の前で死にかけていたら助けるだろう？ただそれだけの理由さ」

どうやらこれに納得したようで、目の前の堕天使は僕に一礼すると、アーシア・アルジェントを抱えて飛び去っていった。

「さて、とりあえず言いたい事はたくさんあるのだけど。まずは一つ。大丈夫かい？」

「……尊!?お前……助けてくれたのか？」

「言わなきゃ分からないかい？それ以外ないだろう？」

「ツ!!そんなことよりアーシアを!!」

そう言っつて兵藤一誠は飛び出した。僕は兵藤一誠の腕を掴んで行かせないようにする。

すると、兵藤一誠はこれに納得行かないようだ。

「離せ!!俺はアーシアを「助けに行く」とでも?」っ!!」

本っ当にわかってないなあ。この変態は。

今だっつて僕が助けてあげなきゃ死んでいたというのに……

「ああ、そうだよ!俺はアーシアを助けに行く!文句あるか!!」

……これ以上は何か言っても無駄そうだね。

僕が忠告したところでこれは助けに行くことをやめないだろう。

なので、説得できそうな人物のところに行つて頭を冷やしていただろう。

僕は兵藤一誠に気付かれない程度に薄く霧を展開してオカルト研究部部室まで転移する。

「!?お、おい!!なんで俺達部室にいるんだ!」

突然転移したことに驚く兵藤一誠。

兵藤一誠だけでなく、今現在部室にいる部員たちも突然現れたこと

に驚いているようだ。

「！尊とヴァーリ!?それにイツサーまで!?これはどういうことかしら!?」

僕は驚くりアス・グレモリーとその眷属達に事の詳細を話した。

すると、兵藤一誠とリアス・グレモリーの口論が始まった。

内容はアーシア・アルジエントを助けに行くかどうかだ。

案の定リアス・グレモリーはその案を却下したが、兵藤一誠は一步も譲らない。

そんな口論の中、姫島朱乃がリアス・グレモリーに耳打ちをした。

ふむ、会話の内容を読み取るに、どうやら乗り込むらしいね。

そして、リアス・グレモリーは僕とヴァーリも含む部員を全員見渡すと用事があるから少し出かけると言って魔法陣で何処かに行ってしまった。

その際、兵藤一誠にセイクリッド・ギア器 扱う際の注意と駒のプロモーションについて伝えていたので教会を敵地として認めたいだ。

そんな中、兵藤一誠が僕とヴァーリに近づいてくる。

「なあ、尊。ヴァーリちゃん。俺達今から教会に乗り込むんだけどついてきてくれるか?」

……まさかの一緒にアーシア・アルジエントを助けようという勧誘だった。

すると、ヴァーリとセイクリッド・ギア器に宿るアルビオンが僕に念話である提案をしてきた。

『ねえ、ここは話を蹴って兵藤一誠にあの中級墮天使をぶつけてセイクリッド・ギア神 器を完全に目覚めさせるっていうのはどうかな?』

『うむ、それには私も賛成だ。我々が参戦しては赤いのはまた自分目覚めないだろうからな』

『おおーいい案だね!ならそれでいこうか!』

念話によって僕達の方針が決まったので、僕は兵藤一誠の勧誘を

断った。

兵藤一誠はかなり渋りながらもこの返答を受け入れ、木場裕斗と塔城子猫と共に外に飛び出していった。

さて、そうと決まればあの墮天使達の監視をしているフリードにも連絡を入れておこう。

『もしもくし。こちらフリード・セルゼン！そんで尊さん。どしたの？』

『いやあ、実はこの前話したブリステッド・ギア赤龍帝の籠手の所持者がそちらに向かっていてねえ。そこで、その所持者と今監視中の中級墮天使が対峙するように誘導してほしいんだ』

『ほうほう！それはその所持者を覚醒させるために!?!』

『ああ、その通りさ！ちなみに、その所持者と一緒にいる悪魔達も殺しちゃだめだよ？』

『わかってますよ〜んで要件はそれだけですかい？』

『ああ、あと。もう監視任務は終了していいよ。父さんからもあの墮天使四人は悪魔の管理地で事に及んだから切り捨てるって通達が来たからね』

『うっし！これで一息つけるんすね！いや〜、やっとあの至高の墮天使（笑）達からおさらばできるぜ！』

『じゃ、頼んだよ！』

『ほいほーい！』

とりあえず、兵藤一誠とあの中級墮天使を対峙させるようにする事と、監視任務終了のお知らせをしておいた。

さて、準備は整った！あとは兵藤一誠のブリステッド・ギア赤龍帝の籠手が覚醒するのを見守るとしようかな。

第4話

僕達は現在、自分達の家に戻って遠見の魔術を使って兵藤一誠達の様子を観察している。

おや、彼らがフリードと接触したみたいだね。

フリードには殺さないように言っているけど、どうやらフリードの隣にいる狂人神父君が殺す気満々みたいだ。

あ、狂人神父君が早速襲いかかった。それを木場裕斗が魔剣で受け止める。

ふむ、どうやらあの魔剣は光を喰らう魔剣。『ホーリー・レイザー光喰剣』のようだね。

おかげで狂人君の光の剣が刃を失ったようだ。

そこへ兵藤一誠の拳がのめり込む。

へえ、『戦車』にプロモーションしたんだね。でも、まだまだ本人のスペック的に『女王』になることはできなかったみたいだけれども……

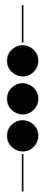
それにしてもあの狂人神父君を吹っ飛ばすとはね。

あの狂人君。パツと見だと『エクスシスト悪魔祓い』の中では中の上位の實力はあると思うんだけど。まあ、あの狂人君。慢心しちゃってたみたいだから当然か。

あ。狂人神父君がキレた。どうやら兵藤一誠に殴られた事が余程気にいらなかったらしい。

激おこ状態の狂人神父君に対処すべく、三人が周囲を囲む。

これにはお馬鹿な狂人神父君も危機を察したらしく閃光玉で三人の目を眩ませると捨て台詞を吐いて退散していった。



……うわあ。あのブルド？だっけ？グレモリー眷属達に負けてから捨て台詞吐いて逃げてっちゃったよ……

あ、ドーモ。フリード・セルゼンです。見たまんま上の命令で至

高の墮天使（笑）達の監視任務やってまゝす。

んで、ブルドを倒したグレモリー眷属三人組が今度は俺つちに標的を定めちゃってるじゃねえツスカ……

「さあ、後は君だけだよ、神父」

「……うーん。ここは素直に通してあげてもいいんだけどそれじゃあ面白味に欠けるよなあ……」

「そうっスね。……それが何か？」

「ここでお前を倒して先に進む！覚悟しろ！神父!!」

ええ、なんかグレモリー眷属の『兵士』君に倒す宣言されちゃつてるよ俺つち。

「……確か殺さなければいいんすよね？」

よし！

「ほい！」

パキン

「くっ！」

おお。即座に接近されて魔剣を砕かれた事に驚く『騎士』君。

でも中々優秀じゃないツスカ。

一瞬で魔剣が砕かれた事により実力差を判断して撤退できるとはね。

やつぱり一番才能あるのはこの子でしたか。

「なっ!？」

「……それに対してこっちの『兵士』君は才能に恵まれていないみたいツスね……ぶっちゃけ今の攻防くらい見えないと話にならないんですが……」

すると、『騎士』君が何かを決めたようで。

「兵藤君。小猫ちゃん。君達は先に地下に向かってくれ！この神父の相手は僕がする！」

「そんなことできるわけねえだろ!!俺達も一緒に」

「……兵藤君。ここは誰かが残らなくちゃいけないんだ。君はシスターを救出するんだろう？」

「……ナニ？この俺の事は構わず先に行け!!的な少年漫画ヨロシ

クな展開は……

あーあ、なんかやる気失せしまわ。んじゃ、とつとと退散すると
しましようかね〜

「……通つていいっスよ」

「……どういことだい?」

「言葉の通りっスよ。なんかもう面倒くさくなつたので。バーイチャ
！」

そう言い残して俺たちは霧に包まれて転移。途中、ポカンと間抜け
ヅラしてる『兵士』君が見えたけどどーでもいいっスね。



「やあ、お疲れ様、フリード」

「お疲れ〜」

「いやあく疲れたツス。なんかグレモリー眷属三人組には敵視される
し、監視は面倒くさいしもう災難つしたわ」

フリードを回収して引き続きグレモリー眷属達の様子を観察する
ことにする。

さて、ちゃんと兵藤一誠の赤龍帝ブーステッド・ギアの籠手は目覚めるのだろうか?

ひとまず、三人と相對したフリードの感想を聞いてみることにしよ
う。

「フリード。あの三人に相對してみてもうどうだった?」

「……そうっすね〜。現時点ではどう転んでも大した脅威にはなり
ませんわ。でも才能には恵まれてるツスね〜

……あの『兵士』君以外は」

「……そつかあ……あんなのが私のライバルって……
ハア」

「ヴァーリ。元氣出して」

しまった。ヴァーリの心に更に深い傷ができてしまった!!我なが
ら失態だったかな。

「……あくあ、これは次代に期待するしかないかなあ？」

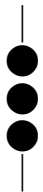
「いや、流石に早すぎないかい？せめて禁手に至るくらいまでは……」

「……そうだね。至ったら私と戦って逝ってもらおうかな」

「……容赦ないッスね」

若干フリードが僕とヴァーリの会話の内容に引いてる気がするけど気にしなあい、気にしなあい！

それじゃあ、観察を再開するのでしょうか。



「アーシア！起きろ！アーシアアア!!!」

クソツ！どうしてだよ!!なんでアーシアが死ななきゃならないんだよ!!

「アハハハ!!何!?悪魔がシスターの心配!?何よそれ!!アハハハハハハ!!!」

目の前でレイナーレは高笑いしてやがる!!

許さねえ!!こいつのせいでアーシアは!!

「ハアアアアツ!!」

「うるさいわね!!下級悪魔の分際で！この至高の墮天使レイナーレ様に対して礼儀がなってないわよ!!」

「アアアアアツ!!!」

痛え!!足に光の槍が二つ刺さった！光は悪魔にとっての猛毒。俺は力なく地面に膝をつく。

「そうそう！あなたみたいな下賤な輩はそうやって跪いていればいいの!!ハハハハハ!!!」

チクシヨウ！チクシヨウ！チクシヨウ！チクシヨウ！チクシヨウ！チクシヨウ！チクシヨウ！

なんでだよ!!アーシアはなんにも悪くないだろ!!巫山戯んなよ!!何が神様だ!!救いも何もねえじゃねえか!!

いきなり現れて体を支えられたからか驚きを隠せていない兵藤一誠。

「尊!?ヴァーリちゃん!?なんで?」

「うん。至高の墮天使(笑)を倒して倒れそうだったから支えてあげようと思ってるね」

「……ていうかさっきの戦い見てたのかよ!」

「ああ。君のそれが覚醒するのを見届けるためさ」

「ツ!?そんなことよりアーシアを!!」

おお、自分のことよりそこに倒れてるシスターを心配するとは。すると、後ろからリアス・グレモリーが声を掛けてきた。

「……どういうことかしら?あなた、今まで何をしていたの?」

「いやあ、一誠君の持つ神セイクリッド・ギア器が未だに覚醒していない状態だったからね。完全に覚醒させるために向こうに倒れている至高の墮天使(笑)と一誠君を対峙させたんだよ。そして、僕達は今までその戦いの様子を観察していたというわけなんだ」

「……死んだらどうするつもりだったのかしら?」

「君たちだって手を出さなかったじゃないか」

「……」

僕の返答に黙り込むリアス・グレモリー。というか君達も同じ事しようとしてただろう?手を出さなかったのが何よりの証拠だよ。

「ねえ。ところで一誠君。私の前に立って何か感じるものはない?」

僕達が無言の睨み合いをしていると、ヴァーリが兵藤一誠に問い掛ける。

「……言われてみれば、さっきから左腕が燃えるような感じが……」

兵藤一誠がそう答えた瞬間。彼の左腕とヴァーリの光翼が光り、威厳ある声が教会に響いた。

『漸くお目覚めか、赤いの』

『ああ、その通りだ。久しぶりだな、白いの』

『せっかく出会ったのにこの状況ではな』

『いいさ、いざれ戦う運命だ。こういうこともある……それに、今戦っても結果は火を見るより明らかだからな』

『それもそうか。ならば暫く休戦か？ 白いの？』

『そうだな。たまにはこういうのもいいだろう』

おお！二天龍同士の会話か！これは珍しいものが聞けたね！この会話に、僕とヴァーリ以外の皆は驚きを隠せないでいる。

「赤い龍。．．．．．イツセーの神セイクリッド・ギア器はまさか．．．．．神滅具ロンギヌスの一つ。
ブーステッドブーステッド・ギア」

『赤龍帝の籠手』!？」

「え!?何!?これ、どういう状況!?それに何か俺の神セイクリッド・ギア器が喋りだした!?」

ええ、肝心の兵藤一誠が何も分かってないなあ．．．

コレには思わずアルビオンも

『赤いの。お前の宿主は．．．．．その．．．．．アレだな』

『．．．．．言わないでくれ、白いの』

うーむ。アルビオンがドライグを憐れむ日が来るとはね。世の中って不思議だなあ。

「部長。俺のこれ。一体何なんですか？なんかヴァーリちゃんセイクリッド・ギアの神器と会話し始めましたし．．．．．」

「．．．．．いい？よく聞いて。その神器セイクリッド・ギアはただの『龍の手』トウワイズ・クリティカルではないの。極めれば神や魔王をも超える力を得られる十三種あるロンギヌス神滅具の一つ。『赤龍帝の籠手』というもののなの」

これを聞いた兵藤一誠は啞然としていた。

ふむ、それもそうか。ありふれた神器セイクリッド・ギアだと思ってたら実は神や

魔王をも超えれるとんでも神器セイクリッド・ギアでした。なんて知ったらこうなる

か。

「．．．．．そして、ここからが重要な。よく聞いて。『赤龍帝の籠手』ブーステッド・ギアの所有者と白龍皇の光翼の所有者は代々殺し合っているのよ」

「．．．．．え？」

うん。今度は口を開いて啞然としていた。

まあ、無理もないか。その殺しあっている所有者が現時点、目の前にいるからね。

「理解した？一誠君。．．．．．ああ、私は今ここで戦うつもりはないよ？だって一誠君。弱いし」

「そ、そうですか・・・」

「ま、何がともあれ、改めて挨拶はしなくっちゃね！」

「え？あ、はい」

「私の名はヴァーリ・ルジーナ。今代の白龍皇だよ。」

よろしくね？今代の赤龍帝。兵藤一誠君！」

そう言っつて、ヴァーリは背中の中を光翼をより一層輝かせ、無邪気な笑顔と共に宣言した。